02/04/19付電気新聞

2002年(平成14年) 4月19日(金曜日)　(第三種郵便物認可)

時評

「エネルギー問題に発言する会」

石川 迪夫

いしかわ・みちお＝原子力発電技術機構技術顧問。56年東大機械工学を卒業し、日本原子力研究所東海研究所副所長などを経て91年、北大工学部教授。原子力発電と安全工学が専門。兵庫県出身、68歳。

四月五日付の本紙に紹介された話であるから、御存知の方も多いことであろう。見出しの名称の会が名乗りをあげた。エネルギー問題について積極的な発言を行う決心を固めた人達の新集団だ。会員のほとんどが六十歳以上。原子力発電の黎明期にそれぞれの分野で研究開発に汗を流された人達ばかり、技術的には超一流の集団だ。

会発足のきっかけは囲碁だ。僕もその一人だが、会員の中に囲碁の愛好者が幾人かいて、時折集まっては烏鷺を戦わせていた。終われば一杯となるのは世の常。余韻の残る勝負の感想とともに出る話は不甲斐ない原子力界の現状だ。それは原子力を公正に評価しない世間に対する嘆きでもあるが、その鉾先が偏頗な論調を繰り返すマスコミに向かい、危険性を誇大に喧伝する反対派に及ぶのは当然だろう。

だが、こんな嘆きの繰言では問題は解決しない。語ることすらタブー視されている原子力の素晴らしさや真実を、世の中に伝える者は一番原子力をよく知っている我々しかいないとの認識で一致したところが出発点だった。

余談だが、欧米人がいうデモクラチックな雰囲気とは、ほの暗い燈火の下での熱気溢れる談話の光景だ。フランス革命時代のカフェでの政治談義がそれだが、会発足の決心も赤提灯下でのデモクラシーだった。だが、その後の運びは日本流だ。最年少の林勉さん（元日立）が世話役の労をとられたのだ。

呼びかけに応じて集まった原子力シルバーが約三十人。昨夏以来、月に一度ほど集まっては下相談をした。全国に散らばる会員の意見や情報の交流手段は電子メールとし、ホームページ（http://www.engy-sqr.com）を開設した。

発言は基本的には会員の自由意思と責任で行い（時には会の名で発表もあるが）、発表した意見はホームページに掲載・公開するというものだ。従って会員間で見解を異にする発言が出ることは十分有り得るが、会の基本合意は原子力の真摯な推進を旗印としている点だ。

難問は会員の発言が開陳できる場所だった。嫌原子力風潮の強い今日、新聞雑誌に投稿して採用して貰うのは難しい。政府関係の意見公募には積極的に参加するが、それ以外にアテはない。単にホームページだけというのも芸がない。場所がなければ折角の決心も腐ってしまう。

困った時は石の地蔵さんとやら。「原子力報道を考える会」の尾崎正道さんに相談したところ、「積極的な発言が最も効果を現すのは事故時の報道。取材記者は誰しも信のおける助言者を求めている。ところがこれまで推進側の人達は物を言わなかった。これが今日のマスコミの報道体制を作っている。技術的に確かな皆さんが取材に協力すればマスコミにとっても有り難いし、報道構造を変えるきっかけともなろう」との御託宣だ。

事故・トラブルの混乱期に発言するのは混乱に拍車をかける因だ。いや後輩に迷惑がかかるとの声もあったが、積極的な発言を志した以上吉い上着を脱ぎ、求められれば経験に裏打ちされた技術的判断をマスコミに提供しようとの意見に固まった。同時にいろいろな機会をとらえて、原子力の技術問題について正しい知識の普及に努めようと申し合わせた。

この折角の決心を相手側マスコミに伝えなければ意味はない。この四日、科学技術やエネルギーに関わる記者クラブに対し、林さんを中心に御披露の挨拶を済ませた。決意を披歴した以上実行していかねばならない。これまでの仲良しクラブでは済まされない。活動の手始めに、いずれマスコミの話題となるであろう高経年化問題やMOX炉心の安全問題などを、会員間で論議しておくことを考えている。

会の発足までは下準備を話し合った人達だけで行った。何の実績もないまま会員募集は気が退けたからだ。だがマスコミに決意を披歴した以上、事情は変わった。趣旨に賛同される方々の奮っての入会を、この欄を借りて御願いする。

事務局のメールアドレスは、hayashi_tsutomu@mwe.biglobe.ne.jp。